

## 探究する聖霊

——初期オリゲネスにおける解釈学的原理——

久 山 道 彦

### 一、はじめに

オリゲネスの初期の聖書解釈における根本的原理とも言うべきものを探ろうとする場合、『原理論』は言うまでもなく、『詩篇注解』の残存断片と『創世記注解』の最初の数巻と共に、初期の浩瀚な聖書注解である『ヨハネによる福音書注解』<sup>1)</sup>を分析することは極めて重要である。『ヨハネによる福音書注解』の最初の五巻は、おそらくはオリゲネスが聖書解釈に基づく体系的書物である『原理論』を著作したのとはほぼ同時期に、アレクサンドリアにおいて口述されたと考えられており、<sup>2)</sup>『ヨハネによる福音書注解』自体が古代キリスト教における最初期の新約聖書注解書であり、オリゲネス研究において常に問題となるラテン語訳ではなく、大部分がギリシア語原文により今日まで伝えられているからである。<sup>3)</sup>更に重要なことは、この『ヨハネによる福音書注解』が、オリゲネスの聖書解釈の方法論を示す序文を持っていることである。それは、トロヤセンが指摘しているように、オリゲネスが福音というものの本質を如何に理解しているのか、またその解釈は如何なる方法でなされるべきであると考えているのかということを知るため

の素晴らしい資料なのである。<sup>①</sup>

小論の目的は、オリゲネスの聖書解釈を根本において支える思考法ないし解釈学原理を少しでも解明することである。そのために、まず、初期のオリゲネスの体系的な聖書解釈学が展開されている『原理論』の第四卷一―三章に基づいて、その聖書解釈の根本モチーフを示し、次に、『ヨハネによる福音書注解』の序文に言及しつつ、その根本モチーフと同じ解釈学的思考法が用いられていることを明らかにしたい。それにより、『原理論』において深い原理的反省に基づいて提示されているオリゲネスの解釈学原理が、『ヨハネによる福音書注解』の序文においても、原理的・方法的に考究されていることを理解したく思う。そして、『ヨハネによる福音書注解』のみならず、以後のオリゲネスの注解書において、実り豊かに実践されていった諸々の具体的釈義が、その基礎としての聖書解釈における基本的思考法と、如何に密接に関係しているかを解明するおおよその枠組みを明らかにしたく思う。その結果、聖書の解釈において一貫した力動的解釈学原理を確立せんとしたオリゲネスの信仰的探究の努力を我々が理解し、その解釈学原理が、オリゲネスの解釈学的思考法と神学的体系との溝への架橋となる手掛かりを与えていること、<sup>②</sup> 更にはオリゲネスの解釈学が今日の聖書解釈学におお貢献し得る本質的特徴を備えていることを、併せて認識できればと思うからである。

二、『原理論』における解釈学原理としての

《聖霊》と《探究》という根本モチーフ<sup>③</sup>

「解釈学原理」を問題とする場合には、或るテキストを解釈する際に用いられる何らかの解釈技術や解釈方法を

意味するのではなく、むしろそのような解釈という行為の基盤となるべきもの、まさにそれによって釈義及び解釈の営みが可能となるような根本的な思惟方法・思考の枠組みを説明することが課題となることは言うまでもない。更に、聖書解釈学においては、キリスト教信仰と学問的厳密さの両面において自覚的であり、その方法論が慎重に吟味・内省されているべきであることも言を俟たない。

オリゲネスの聖書解釈の理論と実践を兼ね備えている『原理論』の第四巻において、オリゲネスは、その解釈学とも言うべきものを、聖霊の靈感から始めている。<sup>8</sup>この「靈感 (*θεόπνευστος*)」とは、オリゲネスによれば、預言者と使徒達を照明することにより、聖書に関して聖霊が教え導く働きを意味しており、その聖霊の働きによって、聖書テキストに出逢う読み手は、聖書の意味するところを探り求め、更には、神的事柄の深い意味を探究することに専心することにより、神の奥義に参与する者となることができるのである。<sup>9</sup>聖霊は、聖書テキストの字義的・歴史の意味をも意義深くする上、<sup>10</sup>場合によっては、聖書における神的事柄を露にしたり、隠したりするのである。聖書テキストを通じて、聖霊は、「読み手を探究へと促すこと (*κινεῖν τὸν ἐπιρρηκτικὸν ἕρην*)」<sup>11</sup>を意図し、その読み手を「より熟達した、より探究的なもの (*τοῦ ἐπιρρηκτικέου καὶ ἐπιρρηκτικέου*)」<sup>12</sup>と成そうとするのである。つまり、聖霊は、聖書の読み手をして、聖書の「より深き意味を (*τὸν βαθύτερον νόον*)」<sup>13</sup>能動的に探究する者と成すのである。ここにおいて、我々はオリゲネスの解釈学における力動的契機、すなわち聖霊によって生起される読み手の持続的探究という契機を看取することができるが、その絶え間なき探究の性格は、上記の引用箇所に見られる、オリゲネスに特徴的な比較級の使用法においても示されている。<sup>14</sup>

更に、オリゲネスの解釈学において重要な点は、聖霊の「隠す」働きである。聖霊は、聖書が意味するところを解

明するのみならず、聖書を読み手が理解する上で躓き (*trudnata*) や妨げ (*preprečanja*) となるもの、そして実際に起ころのが不可能な事柄 (*neobavne*) を聖書の中に置いている。<sup>16</sup> しかしながら、オリゲネスによれば、聖霊は、このようにすることによって、聖書の読み手が、そのテクストの従来の解釈に何の疑問も抱かずに従ってしまうことを阻止しているのである。聖霊は、聖書を読む者一人一人をそれぞれにに応じて神的な事柄へと導くのであり、聖書テクストとその意味への絶え間のない多様な接近を、各人が相応しい仕方で行うことを可能にしているのである。<sup>17</sup>

このような聖書に関わる聖霊の主導性、つまり聖霊の主体性は、聖霊こそが聖書の「著者」であるのみならず、聖書の解釈者であると言い換えることもできよう。<sup>18</sup> そして、かかる《聖霊》と《探究》という解釈学上の根本モチーフにおいて、我々が看過しえないのは、オリゲネスが聖霊の役割を、聖書の読み手の理解と解釈にまで拡張している点である。従って、聖霊の意図と働きとして、聖書霊感説を解釈することにより、水垣が指摘しているように、オリゲネスは聖書のあらゆる文書に対して有効な普遍的解釈学の基礎を据えようとしたのである。<sup>19</sup>

### 三、『ヨハネによる福音書注解』序文における解釈学の原理としての

#### 「福音と成す」と「イエスに成る」という二側面

オリゲネスは『ヨハネによる福音書注解』の序文において、福音書が聖書全体のなかでの初穂 (*ἀρχὴ*) であることを論証するために、聖書の諸文書において働いている靈感 (*θεωρεωσις*) に言及しているが、この靈感こそ、オリゲネスが『原理論』の第四巻において解釈学の原理として明らかにしようとしたものであった。<sup>20</sup>

先に『原理論』における解釈学的原理を考察した際に指摘した、聖霊によって生起される、聖書の読み手の不断の探究を、『ヨハネによる福音書注解』の序文においても解明するために、聖書テキストとその読み手の双方の持つ力動性についての、オリゲネスの思考法を学ぶことが有益であろう。すなわち、オリゲネスの表現に従えば、聖書のテキストに関しては「聖書全体を福音と成す」と言う契機が、読み手に関しては「イエスに成る」乃至「キリストが自分の内に生きる」と言う契機が、その聖書解釈において重要な役割を果たしているのである。

オリゲネスによって、『原理論』において、聖書を作成したと言われている聖霊は、この『ヨハネによる福音書注解』においては、聖書の中の福音書以外の諸文書を福音と成す (*πάντα... ὁσέ εὐαγγέλιον περιήνευ*) という仕方で行っている。<sup>(23)</sup> イエスがこの世に滞在した後、ロゴスすなわち聖霊は、使徒達の言葉と行いとを福音と成し、それによって、今度は新約聖書全体が福音とされた (*πάσαν τῆν καινὴν εἰς αὐτὰ εὐαγγέλιον*) のである。<sup>(24)</sup> 更に、聖霊は、律法と預言者とを福音と成し、それによって、旧約聖書全体が福音と考へられる (*τοὺς καὶ ἐν τῇ παλαιᾷ διαθήκῃ νομίσταμένους εὐαγγέλιον*) に至ったのである。<sup>(25)</sup> 従って、聖霊の働きによって、聖書全体が福音とされた (*εὐαγγέλιον εἶναι πᾶσαν βίβλαν γραφῆν*)<sup>(26)</sup> と言うことができるであろう。聖書の諸文書の成立において能動的主体として働いた聖霊は、オリゲネスの『ヨハネによる福音書注解』の序文によれば、福音書以外のあらゆる聖書文書を福音と成す形成力、福音的一性において聖書全体を解釈する力をも有しているのである。

更に、聖霊は、福音に出逢う人々、つまり聖書の読み手にも働いている。オリゲネスは、実際の聖書釈義の前提として、聖書テキストの真の意味を、「相応しい仕方で (*ἐπιλαμβάνει κατ' ἀξίαν*)」「厳密に把握する (*ἀκριβῶς καταλαμβάνει*)」ためには、「我々がキリストの思いを持つ (*νοῦν Χριστοῦ εἶχαμεν*)」ことが必要であると言いつつ。<sup>(28)</sup> つまり、

土の器に蓄えられている言葉 (Logos) を、それは究極的にはキリストを意味しているのだが、理解するためには、我々一人一人がキリストの精神 (Eros) を持たねばならないと言うのである。

だが、このような釈義の前提が述べられる直前に、オリゲネスが、十字架上のイエスの言葉に基づいて、次のような解釈学の根本的・根源的原理を述べている点に注意したい。

「誰も、イエスの胸に寄り掛かり、イエスからマリアを受け入れて、(ヨハネがしたように) 自分の母と暮らすことなしには、ヨハネによる福音の意味を理解することはできない。そして、もう一人のヨハネになろうと欲する者は、ヨハネがそうであったように、イエス御自身によって、自分がイエスであることを示される必要があるのである。」

オリゲネスは、イエスがマリアの一人息子であるという見解に基づいて、十字架上のイエスがヨハネに対して、「御覧なさい。この人もあなたの子です。」と言ったのではなく、「御覧なさい。あなたの子です。」と言っていることから、「御覧なさい。この人はあなたが産んだイエスです。」と言うのと同じ意味で言っていると解している。そして、その理由として、ガラテア書二・二十を引用しつつ、次のように語るのである。

「何故なら、(キリストにより) 完全な者とされた人は誰でも、『もはや』その人が『生きているのではなく』、その人の内に『キリストが生きておられる』からである。そして、その人の内にキリストが生きておられるの

で、イエスはその人について、マリアに『御覧なさい。あなたの子』キリストです、と言われているのである。<sup>28</sup>

釈義の前提として、キリストの精神 (εὐχρη) を持ち、ロゴスに参与すると言われる場合には、キリストは読み手にとり客体・対象であるのに対して、解釈の根本原理として、「イエスに成る」、「キリストが自分の内に生きる」と言われる場合には、イエス・キリストは読み手にとり一体となるべき主体なのである。前者は確かにギリシア哲学の伝統の上に立つ考え方であろうが、後者は、しばしば人格的・神秘的関係と呼ばれ、キリスト教的伝統の内に見出されるものであると言えよう。<sup>29</sup> それ故、オリゲネスが、解釈ということを学的に理解する上での根本的原理・基礎として、このような主體的・神秘的側面を、聖書を典拠としながら明確に主張しているのであるから、オリゲネスの解釈学も、その基盤となる信仰も、決して単なる主知主義ではないことが自ずと理解されよう。<sup>30</sup>

既に述べたように、自身の内にキリストの精神 (εὐχρη) を持つ者のみが福音を解釈し得るのであるが、そのキリストの精神 (εὐχρη) は、オリゲネスによれば、聖霊だけが与えることができるのである。<sup>31</sup> それ故、これまで検討してきたことから明らかなように、「聖書全体を福音と成す」ということと、「イエスに成る」ということの二側面は、共に聖霊の働きに基づいているのである。<sup>32</sup>

#### 四、探究への専心

このような聖霊による働きこそが、聖書の読み手をして、その深い意味を献身的に探究することへと駆り立てる。

この探究への専心は、『原理論』において言及されているのみならず、『ヨハネによる福音書注解』の序文においても強調されている。例えば、「従って、我々は、諸々のより善きものへと進むことに専心しているのであるから (*ἐντὶ ἀρεθόμεν ἐπὶ τὰ κρείττονα*)、我々にとり、あらゆる実践と全生涯は神に捧げられたものであり (*ἀνακειμένης θῆθ*)」<sup>(85)</sup>「そして、我々の意図に従ってこれからなされる全ての(注解という)実践の初穂を、聖書の初穂(である福音書の研究)に捧げるのにもある (*καὶ πασῶν τῶν καρ' εὐχῶν ἡμῶν ποδάρεω ἐσομένην ἀπαρχὴν ποιοῦμεθα εἰς τῆν ἀπαρχὴν τοῦ τραφῶν*)」<sup>(86)</sup>と「言われるように、オリゲネスにとっては、聖書をより深く探究することが、まさに全生涯をかけた「献身」なのであった。

このことから、オリゲネスが、その専心的・献身的探究を述べる場合に、「苦闘 (*ἀγών*)」<sup>(87)</sup>とか「力の限りを尽くして探究する (*κατὰ δύναμιν ἐπευφημα*)」<sup>(88)</sup>と「どうような極めて強い表現を用いていることの実存的意味が理解されよう。聖書のより深き意味を求める探究の性質は、聖霊の働きによるものとは言え、決して探究することのみをもって事足りりとするような、方法論に安住する他律的なものではない。むしろ、オリゲネスがその生涯を貫いて、思索においてのみならず実践においても示したような、彼のキリスト教的な人格に裏打ちされた、信仰的敬虔に基づく真摯な営為であったのである。

上述した探究への専心以外にも、既に小論の二、において、『原理論』に関して瞥見したような、オリゲネスに特徴的な比較級の使用法が、既に引用したように、この『ヨハネによる福音書注解』の序文においても多く見出される。従って、これまで考察してきたように、初期の重要な二つの著作に見られる、解釈学的原理に関わる幾多の共通点から、オリゲネスの解釈学が、決して解釈の技術的諸原則に基づく静的で平板なものではなく、聖書を理解する上



で、常に新たな局面を切り開こうとする動的な性格を有する解釈学であることが、一応解明されたと言えよう。<sup>39)</sup>

それ故、聖書テキストとその読み手の間の、聖霊の働きによるこのような解釈学的相互関係は、我々聖書の読み手をして、聖書の字義を始めとして、その奥に隠されている意味に至るまで、絶えず探究することを可能にする。しかし、オリゲネスのかかる解釈学の根本的原理は、この世に現臨し福音を宣べ伝え、出逢う人々に信仰的出来事を生起せしめた歴史上のイエスの根源的な力、そして福音を聴く者がイエス自身と成るために、聖霊として、今日に至るまで聖書の内に働き続けている霊的・永遠のキリスト、すなわちロゴスの持つ能動的な力、つまり、聖書全体が証するイエス・キリストの有する根源的起動力にその根拠を置いているのである。<sup>40)</sup>

## 五、結 論

以上述べてきたことから、我々は次のように結論することができるであろう。オリゲネスの『原理論』において、解釈学的原理としての根本モティーフは、『聖霊』と『探究』であった。そして、聖霊によって導びかれるより深い意味への絶え間なき探究は、聖書テキストの「著者」としての聖霊と、聖霊自身により照明される探究者としての読み手との呼応的相関関係に基づいている。更に、オリゲネスの『ヨハネによる福音書注解』の序文においては、これらの根本モティーフと同じ思考法が、聖書テキストとその解釈者との、ロゴス・キリストに基づく力動的相関関係として表現されている。すなわち、聖書テキストに関しては、すべての聖書文書を「福音と成す」という能動的形成功力が、そして読み手に関しては「イエスに成る」という主体的参与が語られている。だが、それらは究極的には、聖書テク

ストにおいて働く聖霊と同一視される神的ロゴスであるイエス・キリストの根源的起動力に基づいているのである。<sup>42</sup>それ故、この根源的起動力は、聖書解釈学において活きた原理である「聖霊の働き」として解されるのである。

従って、オリゲネスの普遍的解釈学のまさに根本は、聖書を作成し、福音として統一し、聖書テキストとその読み手との間において、聖書の深淵な意味を明らかにし、読み手の探究においてその人を促し、探究へと駆り立てるために、媒介者として働いている。「探究する聖霊」であると結論することができよう。その結果、この「探究する聖霊」が、オリゲネスの釈義における彼のロゴス教説と相關するのである。

かかる解釈学の原理に基づいて、旧約聖書であれ新約聖書であれ、聖書のあらゆる釈義が、聖書テキストと読み手の双方に対して常に開かれた構造を有する、決して完了することのない探究という特性を獲得するのである。まさにこの解釈学の原理こそ、オリゲネスをして、『ヘクサプラ』における厳密なる本文校訂を生み出す、真正なるテキストの探究へと専心させしめた、そして彼の膨大な聖書注解書に見られるような、より深き意味の探究へと専心させしめた根本的モチーフなのである。

オリゲネスは、跋扈する異端的諸説と、それらに対する反動としての偏狭なる字義的解釈主義の何れにも与せず、使徒的伝承と聖書解釈に基づき、つまり、教会的信仰に基づきつつ、キリスト教の伝統において、探究の正当性を追求し、敬虔にして自由な探究の場を確保せんとした。言い換えれば、オリゲネスこそ、キリスト教思想史の最初期において、混淆と峻別において錯綜する信と知の関係の内に、キリスト教信仰と哲学的理性の「間」ないし「場」を究め、「信仰的探究」(*ἡθελὲν ἀεὶ πύρωσις*)<sup>43</sup>、もしくは「敬虔なる探究」(*pie querere*)<sup>44</sup>、という、学問的に真摯なる信仰的態度を確立せんと格闘した思想家だったのである。しかしながら、この信仰的探究は、既に述べたように、決し

て「信じること」と「理解すること」の安易な折衷や妥協的産物ではなかった。むしろ両者の緊張関係に自覚的でありつつ、隘路を粘り強く切り開いていくが如き、専心的・献身的努力の賜物であった。それ故、オリゲネスの解釈学は、聖書の読み手が靈的パンを怠惰に貪ることを許さない、探究への根源的力動性を有している。それは聖書の読み手をして無自覚に従来の教説に追従することを許さず、また理性の傲慢を深く自覚するが故に、学問的方法におけるあらゆる限界を突破せしめんとする。時として、聖書を読み、その深き意味を探らんとする者は、言語を絶する神の出来事に直面して、論理を中断せざるを得なくなるかもしれない。だが、それでもなお、「すべての事を究め、神の深き所まで究むる御霊」<sup>(15)</sup>に導かれて、再び真摯に敬虔に聖書のより深き意味を探り続ける生を歩むのである。

初期オリゲネスの解釈学的原理である「探究する聖霊」は、今日でも聖書の読み手としての我々にとり、その有効性を失ってはいない。むしろ、その解釈学的原理の本質そのものからして、将来における聖書の意味探究の更なる課題、解釈学の可能性を、今なお完全に有していると言えるのである。

## 註

(1) 本論文で使用したテキストは以下のものによる。『*Origenes Werke*. Vol. 4: *Der Johanneskommentar* (GCS 10; Leipzig: Hinrichs, 1903)』<sup>(16)</sup>と『*St. Origene's Comment on the Gospel of John*』<sup>(17)</sup>の校訂による GCS の頁及び行数を示した。ただし、有益

探究する聖霊

<sup>(15)</sup> 註 6 の *Origene, Commentaire sur Saint Jean*: par C. Blanc, (Sources Chrétiennes N° 120, 290, 222, 157, Paris: Les Éditions du Cerf, 1966-1982) の随時参考とした。<sup>(16)</sup> 参考とした翻訳は、Blanc による仏訳及び A. Menzies, intro. and trans., *Origene's Commentary on the Gospel of John* (ANF 10; Michigan: Eerdmans, rep. 1980) の英訳による。『原理論』<sup>(17)</sup> は J. H. Gögemanns und H. Karpp, eds., *Origenes:*

Vier Bücher von den Prinzipien (2nd ed.; Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1985) の『De Prin.』の序・第一章・節や、Koštschau の『GOS』の頁及び註に於いた。また、Origene, *Traité des principes*: par H. Crouzel et M. Simonetti, (Sources Chrétiennes N° 252, 253, 268, 312; Paris: Les Éditions du Cerf, 1978-1984) の随時参考とした。なお参照した翻訳は、上記の二つのテキストの校訂者による独語と仏語の各訳及び Koetschau の校本と掲げ、G. W. Butterworth, ed. and trans., *Origen, On First Principles* (Gloucester: Peter Smith, 1973) の英訳による。

- (2) 『モンネによる福音書注解』の成立年代に関する諸説を整理し、簡潔に論じているのは、小高毅による『モンネによる福音書注解』解説である。オリゲネス『モンネによる福音書注解』(小高毅訳)、創文社、一九八四年の四〇九頁参照。
- (3) トロヤセンは、『モンネによる福音書注解』の重要性を認識しつつも、『モンネによる福音書注解』が各節毎の釈義的手続きを研究するには余りに膨大であること、この注解書がグノーシス主義者ヘラクレスオンによるモンネによる福音書注解に対する反駁のために書かれたものゆえ、その駁論的性格からして新約聖書テキストについてのオリ

ゲネスの釈義の典型とは言えないこと、この二点からの研究対象として『モンネによる福音書注解』を除外しよう。Cf. Karen J. Torjesen, *Hermeneutical Procedure and Theological Method in Origen's Exegesis* (Patristische Texte und Studien 28; Berlin and New York: de Gruyter, 1986) p. 21.

- (4) Cf. K. Torjesen, *Hermeneutical Procedure*, p. 66, n. 48. トロヤセンが、自身の研究における分析の主たる対象から除外しているにもかかわらず、確かに『モンネによる福音書注解』の価値を認めているように注した。

- (5) Cf. K. Torjesen, *Hermeneutical Procedure*, pp. 10-11. オリゲネスの解釈学的原理と彼のロトス教説との全般的関係については、この小論の扱う範囲を越えるので、別の機会に譲りたい。

- (6) 本章の議論は、次の洞察力溢れる刺激的な研究に多くを負っていること、あらかじめ述べておきたい。Cf. W. Mizugaki, "Spirit" and "Search": *The Basis of Biblical Hermeneutics in Origen's On First Principles 4.1-3* (Eusebius, Christianity, and Judaism, ed. by H. W. Attridge and G. Hata, Detroit: Wayne State University Press, 1992) pp. 563-584. なお、この論文のもとは、水垣渉「オリゲネス『原理

論』における聖書解釈学の原理としての《靈》と《探求》」(『宗教研究』二十七号、一九八九年)、一一九—一二〇頁である。但し、小論では、水垣において充分に論じられていないと思われる《靈》と《探求》との関係を、『ヨハネに於ける福音書注解』の序文を考察するところから、ついで解明せんとする筆者の論旨に基づいて、『探求』ではなく『探求』を用いることをお断りしたい。

(7) Cf. W. Mizugaki, "Spirit" and "Search", pp.563-564.

(8) Cf. *De Prin.* 4. 1. 1 (p.292, 5).

(9) Cf. *De Prin.* 4. 2. 9 (p.321, 3—p.323, 2). オリゲネスに於ける靈感説の靈的意義に関しては、次の文献を参照。

H. de Lubac, *Histoire et Esprit: L'intelligence de l'Écriture d'après Origène*, (Paris: Aubier, 1950) pp.296—304.

(10) Cf. *De Prin.* 4. 2. 7 (p.318, 8—p.319, 3).

(11) Cf. *De Prin.* 4. 2. 8 (p.320, 15—p.321, 2).

(12) Cf. *De Prin.* 4. 3. 1 (p.324, 6).

(13) Cf. *De Prin.* 4. 2. 9 (p.322, 8—9).

(14) Cf. *De Prin.* 4. 2. 9 (p.321, 15.).

(15) オリゲネスがその解釈学にならざる、持続的探究を重視していることの例を、他に挙げるつもりだが、水垣が指摘している

いるように、オリゲネスが聖書解釈についての実質的な議論の最後とも言える『原理論』の第四卷三十四章十四において引用しているペリピ書三・十三に「*σπέρη* (semper)」を挿入している点がおかしい。Cf. *De Prin.* 4. 3. 14 (p.347, 1—4). Cf. W. Mizugaki, "Spirit" and "Search", pp.578—579.

(16) Cf. *De Prin.* 4. 2. 9 (p.321, 6—8).

(17) Cf. *De Prin.* 4. 2. 9 (p.321, 8—11). 更に、このよびな聖書解釈上の躓きや妨げとも思われることが、旧約聖書のみならず新約聖書にも含まれていると語られる。それは、聖書に於て、靈的な出来事の中に存する連関を我々が知り (p.321, 11—15) 旧約も新約も唯一なる神から發出している聖靈に於て成したものである (p.322, 11—14) を理解するためのものである。このことから、オリゲネスが旧新両約聖書を一貫して解釈する原理として、その靈感により聖書テキストを成立せしめた《聖靈》を取り上げていることが理解される。

(18) クルゼルも正しく指摘しているように、聖靈は聖書の著者であるのみならず、聖書の解釈において諸ひ者を教へる者として、著者の活発な働きを促すのである。Cf. H. Crouzel, *Origène* (Paris: Lethielleux, 1985) p.104; pp.117—118. また、クルゼルも、この点に於いて

- 筆者と全く同じ指摘をしてゐるが、彼は、オリゲネスの諸著作から聖經に關する重要な箇所を集めてはゐるものの、残念な事に、聖經がオリゲネスの解釈学にならざる果たつた原理的役割としてこの洞察を企てなす。 Cf. G. O. Berthold, *Origen and the Holy Spirit (Origeniana Quinta)*, ed. by R. J. Daly, Leuven University Press, 1992) pp.444-448.
- (19) W. Mizugaki, "Spirit" and "Search", p.573.
- (20) Cf. *ComJon* 1.3 (p.6, 23-25). 我々は、次のようにオリゲネスの言葉を註釋するが如しである。"τὸ εὐαγγελικὸν τῶν ἐκ θείας ἐμπνοῆς λόγων" *ComJon* 1.3 (p.7, 1-2).
- (21) Cf. *De Prin.* 4.1.1 (p.292, 5). 尚、本論文の註(20)を(21)を参照。
- (22) 例へば、次のように言ふは、"quod per spiritum dei scripturae conscripiae sint et..." *De Prin.* 1. Praef. 8 (p.14, 6).
- (23) *ComJon* 1.6 (p.11, 4-6). オリゲネスはこの側面を表すために、"παιρικός" という語を用ひてゐる。"ἐχρησθη δὲ τὸ παρρηκὸν τοῦ καὶ ἐν τῇ παλαιᾷ διαθήκῃ νομιζομένου εὐαγγελίου εὐαγγέλιον ἐταροθέως καλεσθῆναι «εὐαγγέλιον»" *ComJon* 1.6 (p.11, 23-25).
- (24) Cf. *De Prin.* 4.2.9. 『原理論』に於て、オリゲネスが "the Logos" (ὁ λόγος, p.321, 14) と "the Logos of God" (ὁ θεὸς θεὸς λόγος, p.321, 7-8) を聖經と同一視してゐるに注意した。 Cf. Görgemanns und Karpp, *Origenes*, p.729, n.37.
- (25) Cf. *ComJon* 1.4 (p.9, 12-22).
- (26) *ComJon* 1.6 (p.11, 23-25). 『聖書と我々』という著書は、R. Cadou (*La jeunesse d'Origène* [Paris: Gabriel, 1935] p.340) が、この「*ἐκ θείας ἐμπνοῆς*」の原文をどう見なされる「聖經と我々の聖書全体の統一性」に關して、同様の思考法を、『原理論』に於て用ひたか、その洞察として用ひて居る。 Cf. *De Prin.* 4.1.6. Cf. *ComJon* 1.6 (p.11, 6-14); 1.13 (p.18, 14-18); 1.15 (p.19, 6-10).
- (27) *ComJon* 1.15 (p.19, 15-16). Cf. *ComJon* 1.6 (p.11, 19-25). オリゲネスは、この「*ἐκ θείας ἐμπνοῆς*」の聖書の部分の文書は福音である。従つて、旧約聖書全体は福音の一部分である。オリゲネスの主張する聖書諸文書の福音の統一性は、福音が全世界に対して宣ひ伝えられたという事実に対応してゐる。 Cf. *ComJon* 1.15 (p.19, 15-19). 尚、本論文の註(23)を参照。オリゲネスの解釈学が持つ終末論的性格に關しては、『*ἐκ θείας ἐμπνοῆς*」の福音書註釋』の序文に限定すれば、以下の箇所を参照。 Cf. *ComJon* 1.4

(p. 8, 4-6); 1. 6 (p. 11, 14); 1. 7 (p. 12, 12-16); 1. 14 (p. 18, 28-32); 1. 15 (p. 19, 20-23). このうち、この「新なる『聖書全体』の範囲とは何処までなのか」という新たな問題が生じる。オリゲネスが解釈学の原理として用いる「福音に成す」という契機の対象は、果たして何処までなのか。オリゲネスが「聖書」と言う場合の「諸文書の明確な一覽表は、ここでは述べられていない。このように、オリゲネスの正典論に関わる重要な問題が、解釈学の原理の考察において著述されたわけであるが、筆者には、ただこの問題について詳しく論じる能力がない。むしろ、ORIGÈNE ET LA BIBLE をメントナーとラビ開闢者に対する大回廊をオリゲネスの Colloquium Originianum Sextum (Chantilly 30 Août - 3 Septembre 1993) に於いて A. van den Hoek と共に「Clement and Origen as Sources on 'Noncanonical' Scriptural Traditions during the Late Second and Earlier Third Centuries」と題して講義を行ったことについて報告しよう。

(28) Cf. *ComJon* 1. 4 (p. 9, 4-11).

(29) Cf. *ComJon* 1. 4 (p. 8, 14-p. 9, 3).

以下、若干長くなるが、原文を引用しよう。  
 “*τομῆς τούτων εἰσὶν ἀραρχῆν μὲν πασῶν γραφῶν*”

探究する聖書

*εἶναι τὰ εὐαγγέλια, τῶν δὲ εὐαγγελίων ἀραρχὴν τὸ κατὰ Ἰωάννην, ὅθ' τὸν μόνον οὐδεὶς δύναιται λαβεῖν μὴ ἀπαρεσῶν ἐπὶ τὸ ἀρχὸς Ἰησοῦ μηδὲ λαβῶν ἀπὸ Ἰησοῦ τῆν Μαρίαν ἱερομένην καὶ αὐτοῦ μητέρα. καὶ τηλικούτων δὲ τευέσθαι δεῖ τὸν ἐσόμενον ἄλλον Ἰωάννην, ὥστε οἴονεῖ τὸν Ἰωάννην δεχθήναι ὄντα Ἰησοῦν ὑπὸ Ἰησοῦ. εἰ γὰρ οὐδεὶς οὐδὲς οὐδέ τις κατὰ τοὺς ὕμνωδες περὶ αὐτῆς δοξάζοντας ἢ Ἰησοῦς, φησὶ δὲ Ἰησοῦς τῆ μητρὶ. »* *Ἴδε ὁ οὐδὲς σουκ καὶ οὐχί »* *Ἴδε καὶ οὗτος οὐδὲς σουκ, ἴσον εἰρημῆς τῶ »* *Ἴδε οὗτος ἐστὶν Ἰησοῦς ὃν ἐρένημας. καὶ γὰρ πᾶς ὁ τετελειωμένος »* *Ἐπὶ οὐδέτις, ἀλλ' ἐν αὐτῶ »* *Ἐπὶ Χριστός, καὶ ἐπεὶ »* *Ἐπὶ αὐτῶ »* *Χριστός, λέγεται περὶ αὐτοῦ τῆ Μαρίαν. »* *Ἴδε ὁ οὐδὲς σουκ ὁ Χριστός. »*

(29) シルヤルが指摘しているように、この箇所はオリゲネスの「神秘神学」を心得るか、この箇所を当時のヘラトニ主義者達に流布しようとした知識と信仰の「格言」すなわち「似たもののみが似たものを知る」という「如何なるもの」の「何を」を知らなければならないか、という「必要がある」か、の「何を」は「問題」である。 Cf. H. Crouzel, *Origène*, Paris: 1985, p. 107. 上記の「何」の箇所におけるオリゲネスの「神学」を規定しているのは、十字架上のイエスの言葉であるヨハネ伝十九: 26-27、ガラ

テヤ書二・二十という聖書テクストだからである。オリゲネスがしばしば引用するこのガラテヤ書二・二十を典拠聖句とすることは、古代教父においては極めて稀であることにも注意しておきたい。

- (31) オリゲネスが、あらゆる事柄の理拠を問い続ける探究的精神の持ち主でありながら、論理の完結性にのみ執着する悪しき合理主義者ではなく、信において生起する事柄に対し、未済の問題が数多くあることを謙虚に認めている点にも、我々は注意を払う必要がある。Cf. *De Prin.* 3, 5, 8 (p. 279, 4-18). 更に、本論文の註の(44)における「論理の中断」を参照。また、伝道という局面において、このオリゲネスの解釈学的原理は次のように表現されると考えられるが、それはオリゲネスの実践神学ならし教会神学の特徴を示していると言えよう。“*Kai Hēthlos mēn kai Hērōos, ēn phanethē pōtēroun ōntes Ioudaioi kai peouretimētoi, bōreoun kai ēn tō kourōtō touōntoi tnyxānein apō Ithōō elēphōtai, tō ēn phanethē ēina Ioudaioi diā tēn pollān oortēlian kat' oikonomian oū mōnon lōgois diabolōntes dala kai diā tōn ēgōn dekenōntes.*” *ComJon* 1, 7 (p. 12, 19-p. 13, 3).

(32) Cf. *ComJon* 10, 28 (p. 201, 11-14; 16-19).

(33) オリゲネスの福音書解釈において、二つの基本的な釈

義が、すなわち解釈から演繹された手続きにおける釈義と、読み手のテクストに対する基本的関係における釈義がある。トロヤセンが指摘しているのは正しい。Cf. K. Tojssen, *Hermeneutical Procedure*, pp. 62-63. しかし、トロヤセンは、この二つの釈義は、異なったジャンルであると考えている。そして、釈義類型を分析することによって、そのことは、オリゲネスの旧約聖書釈義と新約聖書釈義の間の根本的な相違に基づくと結論している。しかしながら、トロヤセンの議論は、『原理論』において、旧新両約聖書における唯一なる神を徹底して主張したオリゲネスが、何故、聖書全体を一貫して解釈し得る解釈学的原理を考究しなかつたのかという根本的疑問を残す。オリゲネスが、『ヨハネによる福音書注解』の序文において、聖書全体としての統一性<sup>20</sup>、そのための一貫した解釈学的原理を明確にするために、幾度も「聖書全体 (*πᾶσα γραφή*)」という表現を用いていることは、看過し得ならず事実である。Cf. *ComJon* 1, 2 (p. 6, 5); 1, 3 (p. 6, 18; p. 7, 25); 1, 4 (p. 8, 15); 1, 6 (p. 11, 23); 1, 15 (p. 19, 16). 聖書の全体的統一性について幾度も言及しているオリゲネスの意図は、彼の解釈学を理解する上で、充分に尊重されねばならない。Cf. *ComJon* 1, 13 (p. 18, 14-18). たゞネオリゲネスが、自らの教説ならし神学的構造に基づいて、解釈の



対象となるテクニストに応じて解釈方法を変えざることを小論において説明しようとしたオリゲネスの解釈学の基盤をなす思考法・思维様式を理解するならば、我々は表面上の釈義的方法論の相違の根底にあるオリゲネスの一貫した解釈学の原理を看取することが出来るのである。また、もしそうでないならば、オリゲネスの聖書解釈は、詰りなところ、自認を正当化するためだけの、キリシマ的思考様式を用いた彼の恣意的な判断に基づいたものにすぎないことが評価しか持ち得ないであろう。そのような批判こそ、オリゲネスに対する宗教改革者達の典型的な評価だったのである。例えば、メラントニーンについては、次の研究が参考になす。 Cf. E. P. Meijering, *Melanchthon and Patristic Thought* (Leiden: Brill, 1983).

- (34) 例えば、次のようなオリゲネスの表現を参照。 "ὅτι ὁ δυνάμενος διδάσκειναι ἔρσησας" καὶ "τοῖς βάθει τοῦ νοῦ τοῦ λέγειν ἑαυτὸν ἐπιδοῦς, κωνωνὸς τῶν ὄλων τῆς βουλῆς αὐτοῦ τέτυκται δογμάτων." *De Prin.* 4. 2. 7 (p. 319, 1-3). このキリシマ献身の探究に於ける聖問の解釈を實踐するオリゲネスの眼には、「諸々の空想や荒唐無稽な仮説に耽つこと」(ἀναπλάσμοις ἑαυτοῦ ἐπιδεδώκασι, μύθοισι ὀυρεῖς ἑαυτοῖς ὑποθέσει.) *De Prin.* 4. 2. 1 (p. 308, 1-2) また「諸々の空想や神話に耽つこと」(ἀναπλάσματος

μύθων ἑαυτοῦ ἐπιδεδώκεται) *ComJon* 2. 28 (p. 84, 29-32) 異端者達による聖書解釈と、自分の聖書解釈とは、原理的にも方法的にも全く対照的であるように映ったのである。 Cf. W. Mizugaki, "Spirit" and "Search", p. 582, n. 22.

- (35) *ComJon* 1. 2 (p. 5, 34-p. 6, 1).  
 (36) *ComJon* 1. 3 (p. 7, 25-27).  
 (37) "ἀλλὰ πᾶς ἄνθρωπος ἔνεργησε περιουμένους εἰς τὰ βάθη τοῦ εὐαγγελικοῦ νοῦ φθάσαι καὶ ἐρσησθαι τῆν ἐν ἀνθρώποις τῶν ἀλλήλων." *ComJon* 1. 8 (p. 13, 17-19) Cf. W. Mizugaki, "Spirit" and "Search", pp. 574-575.  
 (38) "ἀπαρχὴν τῶν εὐαγγελίων εἶναι τὸ ποσοστειγμένον ἡμῶν τοῦ κατὰ δύναμιν ἐρσησθαι, τὸ κατὰ Ἰωάννην" *ComJon* 1. 4 (p. 7, 34-8, 1).  
 (39) Cf. *ComJon* 1. 2 (p. 6, 1), "σπειρόμενον ἐπὶ τὰ κρείττονα", 1. 4 (p. 8, 8-9), "τοὺς μέγλους καὶ τελειοτάτους πρὸς Ἰησοῦ λόγους"; 1. 7 (p. 13, 3), "προσαρταστὲν ἐπὶ τὰ κρείττονα καὶ δυνατέω".  
 (40) *ComJon* 1. 10 (p. 15, 28-30; p. 16, 8-10).  
 (41) キリゲネスは、イエス御自身が御自分の上を主なる神の御言葉に於ける思考とすべしと自ら理解した。 Cf. *ComJon* 1. 10 (p. 16, 14-20); 10, 28 (p. 201, 16-19). 不

論では論じておらず、この「モンネ」なる福音書注釋」におけるイザヤ書からの引用は、詳細に研究せねば植する。人格的キリストとしてのロコスが釈義において能動的主体であると考える点では、ゲグラーの理解に同意し得ぬ。 Cf. R. Gögler, *Zur Theologie des biblischen Wortes bei Origenes* (Düsseldorf: Patmos, 1963) p. 266. トロヤマンの次のような見解を参照。 Cf. K. Torjosen, *Hermeneutical Procedure*, pp. 8-9. オリゲネスは、マタイ伝七・七〜八(この箇所は、周知のようにオリゲネスが愛用する典拠聖句である)に基づいて、「イエス御自身が我々をして探究すべく促していることも理解している。従って、オリゲネスの聖書解釈学を考察する際には、神的事柄の探究において、「タビテの鍵」を持つイエス御自身が根源的起動力を有しているであろうことにも充分留意すべきである。 Cf. *ComJon* 5, 6 (p. 103, 31).

- (42) この意味において「シトタールマン」はキリスト教の聖書解釈史におけるオリゲネスの重要性を正しく評価しようとする。 Cf. P. Stuhlmacher, *Vom Verstehen des Neuen Testaments: Eine Hermeneutik* (2nd ed.; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1986), pp. 79-82. 特に八十頁では「シトタールマン」は、次のよう

に記述している。 "Schon das hellenistische Judentum (Paulus) hatten sich die Allegorese zu eigen machen können, weil sie den zu entschüsselnden Logos mit dem die Schrift erfüllenden Geist Gottes bzw. mit Christus identifizierten. Origenes geht noch einen entscheidenden Schritt weiter und erhebt die Allegorese zum christlichen Auslegungsverfahren schlechthin."

- (43) Cf. *De Prin.* 4. 2. 2 (p. 310, 17-22). この信仰的探求の問題を、キリスト教思想史における中心的課題として注目したのは水垣渉である。「教父の学問的態度としての信仰的探求——オリゲネスの伝統における——」(東北学院大学キリスト教研究所紀要8・東北学院大学キリスト教研究所) 一九九〇年、一〜二十七頁参照。特に九〜十一頁と十九〜二十頁参照。また、この問題を、広く古代キリスト教思想全般にわたり考察している水垣の主著『宗教的探求の問題』、創文社、一九八四年、を参照。

- (44) キリスト教の思想的成立および構造の歴史的分析により、「論理の中断」を考察したのは有賀鐵太郎である。イエスの十字架の出来事によるユダヤ的ハヤトログイアの中断から、弟子達の聖霊体験によるキリスト教的ハヤトログイアへの論理の胎動という思考過程は、小論においては論究し

ていないが、聖書解釈学においても、原理的に十分に考究されてしかるべき課題であると考える。『有賀鐵太郎著作集』第四巻、『キリスト教思想における存在論の問題』、創文社、一九八一年、に収められている「論理の中断」(二〇三〜二一九頁のうち、特に二二五〜二二九頁を参照。また、オリゲネスの解釈学の根本モティーフにおける、ユダヤ教のラビ的解釈との連関については、水垣の指摘を参照。 Cf. W. Mizugaki, "Spirit" and "Search", pp. 575-576.

(45) 小論では詳述しないが、オリゲネスの解釈学的原理を検討する場合に、以下に挙げる『原理論』におけるコリント前書一・十の引用は充分に考察されるべきである。 Cf. *De Prin.* 1. 3. 4 (p. 53, 16-17); 2. 9. 5 (p. 169, 17); 4. 2. 7 (p. 319, 2); 4. 3. 4 (p. 330, 13); 4. 3. 14 (p. 345, 11-12); 4. 4. 8 (p. 360, 9).